

オーケストラ・キャラバン〜オーケストラと心に響くひとときを〜

# 千住真理子

## 延原武春 指揮

### テレマン室内オーケストラ

ヴィヴァルディ

# 四季

& 小品集

#### 【演目】

- テレマン：  
ソナタ ニ長調 TWV44:1
- J.S. バッハ：  
G線上のアリア
- マスネ：  
タイスの瞑想曲※
- クライスラー：  
愛の悲しみ※  
愛の喜び※
- アイルランド民謡/クライスラー：  
ロンドンデリーの歌※
- モンテ：  
チャルダッシュ※
- 千住明：  
NHK連続テレビ小説「ほんまもん」テーマ曲※
- ヴィヴァルディ：  
ヴァイオリン協奏曲集**四季**※

#### 【出演】

- 指揮：延原武春
- ヴァイオリン：千住真理子 (※)
- テレマン室内オーケストラ



2024年 **1/13** (土) 15:00開演 (14:15開場)

アワーズホール・明石市立市民会館 大ホール

#### 【チケット料金】

[指定席] 一般 3,000円  
高校生以下 1,000円  
※未就学児入場不可

#### 【チケット販売】

発売日：10月22日(日)  
販売所：明石、西部、オンライン、ローソン (Lコード：52293)  
※車いすにて鑑賞をご希望の方はエリアに限りがございますので  
チケット購入前に明石市民会館へお問い合わせ下さい。



[主催] 公益社団法人日本オーケストラ連盟・日本テレマン協会  
[共催] アワーズホール・明石市立市民会館  
(指定管理者：共立・NTTファシリティーズ共同事業体)  
[お問合せ] 日本テレマン協会 06-6345-1046 (平日10時～18時)



助成：文化庁 文化庁文化芸術振興費補助金 (統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業 (アートキャラバン2))  
独立行政法人日本芸術文化振興会



300年前に誕生し、今も愛され続けるヴィヴァルディの「四季」

同時期に作られた名器ストラディヴァリウスで聴く贅沢を明石で！



(C) Kiyotaka Saito (SCOPE)

## 千住真理子 ヴァイオリン

2歳半よりヴァイオリンを始める。全日本学生音楽コンクール小学生の部全国1位。NHK交響楽団と共演し12歳でデビュー。日本音楽コンクールに最年少15歳で優勝、レウカディア賞受賞。パガニーニ国際コンクールに最年少で入賞。

2002年秋、ストラディヴァリウス「デュランティ」との運命的な出会いを果たし、話題となる。コンサート活動以外にも、講演会やラジオのパーソナリティを務めるなど、多岐に亘り活躍。また、チャリティーコンサート等、社会活動にも関心を寄せている。20年にデビュー45周年を迎えた。著書は「聞いて、ヴァイオリンの詩」(時事通信社、文藝春秋社文春文庫)母との共著「母と娘の協奏曲」(時事通信社)「千住家、母娘の往復書簡」(文藝春秋社文春文庫)など多数。

千住真理子オフィシャル・ホームページ <http://marikosenju.com/>



## 延原武春 指揮

1963年テレマン・アンサンブルを結成。以来60年の歳月を経てその業績は目覚ましく、日本におけるバロック音楽の探究と普及という専門的領域のみならず、その広い視野と行動力によって、特に西日本の音楽文化の広範な普及に多大な貢献をもたらした。近年では長年の古楽探究を礎とした音楽解釈とその熟練された手腕を持つ巨匠指揮者としての今後が多いに囑望されている。指揮者としてライブツィヒ放送交響楽団やゲヴァントハウス・バッハ・オーケストラなどをはじめとする海外のオーケストラとの共演の機会が幾度もあったにも関わらず、その主眼はあくまでも自らが創設した日本テレマン協会での活動に注がれた。1970

年代後半からその評価は関西を超えて全国的なものとなり、テレマン室内オーケストラ・テレマン室内合唱団との演奏は文化庁芸術祭・優秀賞やサントリー音楽賞を受賞するまでに高く評価されることとなる。延原武春の音楽的業績のうち殊にユニークなのが1982年にベートーヴェンの第九交響曲を初演当時の編成と作曲者指定のテンポに従って演奏すること。これはその当時としては極めて斬新なアプローチであったため、ガーディナーやホグウッドといった古楽演奏家達が延原の第九の録音を所望したというエピソードは大変興味深い。延原のベートーヴェンに対するアプローチはこれに留まるものではなく、2008年にはクラシカル楽器によるベートーヴェン：交響曲全曲・合唱幻想曲・ミサ・ソレムニス・ツィクルスを挙げる。これが契機となり延原は『ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小授章』を授賞することとなった。延原の活動の中心には常に日本テレマン協会が存在してきたことは言うまでもないことだが、その合間には海外楽団からの招聘や、岩城宏之音楽監督時代のオーケストラ・アンサンブル金沢や九州交響楽団などからバロックから古典のレパートリーのスペシャリストとして招かれることもあった。かつて、アーノンクールやガーディナーといった古楽のスペシャリストたちがヨーロッパのモダン・オーケストラから指揮者として招かれるようになったのと似通ったムーブメントが今、延原武春のもとにも起ころうとしている。

## テレマン室内オーケストラ

1963年に指揮者・延原武春が結成。延原の指揮のもとテレマン作曲「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」等数々の作品を本邦初演。「サントリー音楽賞」を受賞した日本初のプロオーケストラでもある(同賞は現在もテレマンと東京交響楽団、京都市交響楽団以外のプロオーケストラは受賞していない)。そのほかの主な受賞歴は、「大阪文化祭賞」、「音楽クリティッククラブ賞」、「大阪府民劇場賞」、「文化庁芸術祭優秀賞」(関西初)等。1990年バロック・ヴァイオリンのサイモン・スタンディジをミュージック・アドバイザーとし、バロック楽器(18世紀当時の楽器およびそのレプリカ)による演奏を始める。2003年にはドイツのバッハ・アルヒーフから招聘を受け「バッハ・フェスティバル」に出演し、C.P.E. バッハ「チェンバロ協奏曲 Wq1」を世界初演した。2006年からはクラシカル楽器(古典派の時代に使用された楽器およびそのレプリカ)による演奏を始め、2007年には同楽器による F.J. ハイドンのオラトリオ「四季」を好演。「大阪文化祭賞グランプリ」を受賞した。「マンスリーコンサート」(会場は大阪倶楽部4階ホール)を舞台に「聴衆とともにつくる価値」の創造に力を入れ、そこをベースに様々な奏者を輩出している。チェンバロおよびフォルテピアノの高田泰治、ヴァイオリンの浅井咲乃などはその代表的な存在として注目を集めている。2012年にはドイツよりバロック・ヴァイオリン奏者ウツラ・ブンディース氏を首席客演コンサートマスターとして迎えた。